

自句自解 (二千七まで)

毎年十句を発表している『韓を詠む』の自解です。これまで自句自解はしない方針でしたが、需要があるようなので作成してみました。

菲 九十五

◆ 春寒に相聞鳥の一所懸命

これは、初めての吟行で作った三句のうちの一。鳥が囀っているんだから、それをわざわざ「相聞鳥」などと抽象的な言い方をしなくてもいいと思う。まあしかし、それは今の時点だから言えることなんだろう。

◆ 山笑い鳩や子供のわらわらと

これは「わらわら出て来た」ということで、「笑う」と「わらわら」のダジャレのようなもの。鳩と子供を一緒にしているのが、雑すぎ

◆ 景福宮の春にひろげた白ドレス

韓国人の新婚さんが王宮などで記念写真を撮っている「韓国あるある」シリーズ。三句の中で一番つまらない句だと思ふ。地名を織り込んでるのは悪くない。

菲 九十六・哲人の国

◆ ダブルベッドもあり夏草の異人墓地

切頭山公園。提出時は「夏草の草の墓地」だったが、推敲して後半をすっきりさせた。前半部のギクシャクした感じが外人の雰囲気

◆ 西瓜だけ並べて夏を売り急ぐ

道端の西瓜売り。季語だぶりよりも、散文的なのが気になる。

◆ 北京からの風か地を駆く散り紅葉

これは強引に五七五に書き上げた感じ。後半部がちやちやしている。それに、「駆くる」と連体形にしなければ駄目だね。

◆ 煉炭を独り占めしてげそ売れり

「暖房器具」という兼題が出されて作った句。この句を褒められて、以後このような句が自分の作風になる(作風とするようになる)。

◆ オンドルもあるぞとふんふん遣り手婆

これも煉炭の句と同じく鍾路にて。こういう季語の使い方(会話に単語が出て来るだけ)は季語の働きの弱い、とはよく言われること。

◆ 山という山眠り戸に薄ぼこり

席題「山眠る」で出した句。つまらない。「つまらない句」なら「失敗作」の方がまだマシだと思ふ。

◆ 陽のあたる冬木ばかりが愛されて

これは自分には珍しく、結構踏み込んだことを言っている。俳句初心者に採られやすい句。

◆ 重話の日本語日本の色を食む

日本に一時帰国した時に作った句。こういうのも「海外詠」の一種になるのかも。正確には「一時帰国詠」。

◆ 哲人の生首ならば初湯かな

ソウルのサウナにて。これは五七五がするつと出て来て、いじりようがなかった。

◆ 狂女のごとブランコ漕げば山笑う

@三清公園。これは、W季語だよ、「のこと」要るのかよ、の二点がネックだろう。言っていることは間違っていないはずだが…。この頃は歴史的仮名遣いではなく、「山笑う」と書いていたのだな。

菲 九十八・曖昧屋

◆ 春の山ゆるり動かす七ノット

漢江遊覧船。「春の山を」という意味なので、理屈では三段切れではないのだが、うーん。「七ノット」は評判が良かった。

◆ 山菜黄を前に師匠のひとくさり

吟行句。吟行にありがちな光景だが、俳句に詠んだのは結構珍しいと思う。

◆ 春光の仄か獄舎の長廊下

@西大門刑務所跡。これは最初「春光」が適切かどうか問われたが、「春光(ある程度強

い) さえも仄かになってしまふところが良いと思つた」との意見が出て終了。

◆ちるさくら自転車の子を追はむとす

これは俳句会句集の初校が「自転車の子が」になっていた。一字違いで大違い、とはこのことか。危ない危ない。

◆莫迦話頭上の青葉ざわめけり

地味な句だが、並選ぐらいで採ってもらえそうな句。

◆タライよりチョップパリ見上ぐ鯨の目

「日本人」と書いて「チョップパリ」とルビを振っていた句。チョップパリは日本人の蔑称である。「チョップパリ」というラジカルな言葉を使った割りにはインパクトのない句になってしまった。「ナマズ」も効いてない。

◆昼寝子やおぶわれてほまつつかれて

この句を悪く言う人はあまりいないと思う。

◆それぞれの層に葉を抱き川凍てる

「見たものをそのまま句にしたもの」と言いたいところだが、今の自分なら「葉を置き」にするかもしれない。

◆放たれし矢落つ再び底冷える

これはちよつと変わった造りをしていて、評判良かった句。ただし、動詞が三つあって、「何がどうしてどうなった」の句、と言われる宿命。多分もつと良い言い方があるのだろう。

◆犬の背の高さとなりし日向ぼこ

椅子に座って日向ぼこをしていたら、ずるずるとずり下がつて、犬の高さになっちゃいました、が句意。これは数合わせで出した句なんだらうと思う。

■ 九十九・連翹

◆連翹のお伺ひとも予感とも

『予感』がなんだかなー。推敲して下さい」と言われた。私の答えは「自分の能力では、この句はもうこれ以上にはなりません」だった。

◆春光や難破してゐる紙の舟

合評では、「春の川、などではなく春光と言つたのが良い」とのことだった。実は、一番最初は「春の川難破してゐる紙の舟」だったが、上五を「春光や」に推敲して出したのである。

◆落つるまで己柳絮と定めたり

これは「地面に着くまで」ということなのだ、それがちゃんと伝わるのか疑問であった。

◆栗の子のとげやはくしてとげならず

「栗の子」という表現は、同行の人が「これは栗の子だよね♪」と言つたのをそのまま利用したもの。便利な言葉をありがとう。

◆君紅を差しませ午後の合歓の花

合歓の花を見ていた時に、傍らにいた人の化粧がちよつと薄めだったので、「もうちよつと頬紅さしてもいいんじゃない？」と思つたのが、句の出来たいきさつ。ただ、この句は自分の中で一物仕立ての句として認識されているみたい。ちよつと説明が難しいけど。

◆残暑かなクレーンに襲はるる倭人

上五の切れ字に「かな」を持つてくるのは良くないと言われています。この句も、絶対に「残暑かな」で始まらなきゃ駄目ってことではないはずなんですけどね。

◆大鶏頭因果末端肥大症

「漢字だけの俳句が出来たよー」と言いたいだけだったのか。まあ、色んな句があるのは悪いことではないでしょう。

◆秋風を耳の後ろで捉へけり

シンプルなのに、類想句が多そうです。句会でこの句が出されたら、自分は採らないと思う。

◆檻にゐてなほ駛るなり山兎

これは「なほ」が余計だと叩かれました。叩かれるのは想定内でしたが、今は『なほ』があってもいいんじゃない？」ぐらいに思っています。「いさせてあげて」みたいな…。それよりも「駛る」が問題で、ここは「走る」で良いのだった。

◆箱の鈴跳ねてる音もイヴのバス

「箱」が「乗客のクリスマスケーキの箱」であることが分かる人は五十%ぐらいでしょうか。「箱はバスのこと？」と思ったりする人もいるようです。

■二千年…白菜

◆ものの芽や月にマリアに近き街

これはタルトネ（貧民街）で作った句。韓国ソウルの貧民街は大体高い所にあるのです。

◆花の下鮎への列の長長し

日本大使公邸での花見会。ケータリングサービスですね。

◆折ること苺一斤掬ふなり

これは果物屋で店のおばちゃんが苺を掬っていると。果物一斤は六百グラムです。

◆緑陰に迷子放送吹かれ来ぬ

これは公園かどこかを吟行した時の句だと思います。

◆大いなる日傘を立てて嬰眠る

漢江沿いの光景だったと思う。大きな傘と子供を対比させている作意がミエミエだが、評判は良かった。

◆読経や黄菊白菊バスバリトン

これは「白菊黄菊の方がいいんじゃない？」と言われた。後ろが「バスバリトン」だからリズム的に「黄菊白菊」でいいと思うんですけどねえ。

◆秋冷を泳ぐや一人太極拳

ソウル大キャンパスに行った吟行句会の時の句。

◆水あふるる市にあふるる白き息

鷺梁津（ノリヤンジン）水産市場で作った句。全体が最後の「白き息」にかかっている変わった造りの句なんだけど、変な句だとは言われなかった。

◆白菜の白き尻より裂かれけり

食堂でおばちゃんが白菜を切っているのを見た。これは多分、今現在の自薦十句（生涯十句）に入っている句。「白菜のまぶしき白を裂

きにけり 柴田艶子」という句があることに注意。

◆懐手出てもしもしの始まりぬ

これは携帯電話のことですが、読み終えて「なるほどね」となる句だと思います。悪く言う、「謎解き句」で終わっちゃってるんですね。

■二千一…風

◆如月や風止むことのなき聖地

これは、季語がこれでもいいのかどうかですが、「ま、いいんじゃないの」ぐらいでしょうか。

◆陵の高き高きへ木の芽風

これは朝鮮王陵の吟行句。お墓の土まんじゅうが相当に高さあるんです。

◆囀や青空を置く数多の木

「青空を置く」というのがかなり変な言い方。その変さに魅力があるわけでもない。

◆銃眼の中は霞に沁みし村

これは、「沁みし村」は駄目で「沁みたる村」などと言わなければならぬ。未だによく分からず。

◆髪切りに来て葉桜の停留所

この句はなんとなく気に入っている。この句を作ってから、葉桜が好きになったのかも。

◆夏めくや湖の速度に乳母車

「速度」という言葉が評判悪かった。「普通に『速さ』にしたら？」などと。自分はこういう音読みの漢字語を使うのは嫌いじゃないんですよね。ざらざら感があつて。

◆かなかなの降るベンチまだ濡れてゐる

これは予想通り「かなかなや、で良い」と言われる。そりや確かにそうなんですけど、「雨が降っていた」ということで、「降る」を入れたかったんです。

◆そこここにさてはの男女秋の蝶

「思わせぶりの言い方はよくない！」と言われそうですが、批判はされなかった。まあ、思わせぶりの私じゃなくて、ここにいた

カップルなんですよね。

◆ 芒野の責められて責められて風

この五拍の繰り返しは時々見かけるパターンだと思えますが、この句の内容にはあまり合っていないような…。

◆ 炭負ひの踏む石段の傾けり

韓国のテレビのドキュメンタリー番組を見て作りました。実は煉炭の宅配屋です。

■ 二千二：春コート

◆ 真四角のバス追ひかけて春コート

普通の冬コートだとたなびかないから駄目でしょうね。自分は春コートという季語だけでなく、春コートそのものも好き。

◆ マネキンをひしととりこむ万愚節

マネキンと万愚節がありがちな取り合わせかも。自作の万愚節の句の中では、これが一番好き。

◆ 風車かぜおもひだしまはりけり

これは中七を得るのに非常に時間がかかった自分の中では風車の句はこれで終わっている。

◆ 往來の盥にそそぐプチトマト

露天商が売り物のプチトマトをセッティングしているところです。「往來」って言い方がイマイチか。

◆ 薫風やはねてはひらくチアガール

これはチアガールの本質を鋭くえぐった（つもり）句。大学構内での練習風景です。

◆ 水を打つ来てゐるはずのEメール

帰宅後、家に入ってメールを確認する前に水を打っています。当時は移動中にメールの確認が出来ませんでした。

◆ 炎昼や身をひきずつてゐるデジャヴ

「デジャヴ言いたかったけどちやうんかい！」：否定は出来ない。

◆ 岡持を路上に洗ふ晩夏かな

「晩夏がなあ…」と言われた。そう言われちゃうのは、上五中七が悪いからでしょうね。

◆ 黄落や携帯に首傾げゆく

キャンパスの銀杏並木を歩いている女子大生です。

◆ 男女にて背中合せのコートかな

地下鉄車内。ちなみに、自分は俳句では「男女」を「なんによ」と読みますので、そこんとこ宜しく。

■ 二千三：朝焚火

◆ 夜桜やきつねをすゝる人の妻

これは「きつねうどん」のことですが、この省略（きつねうどん↓きつね）の仕方は駄目なのかも。

◆ 墓石に背き連翹垂れにけり

これは最初「背き」じゃなかったはず。推敲前が何だったかは不明。

◆ 煉瓦塀たかければ薔薇そらにさく

「ネットで検索している時に、杉久さんのこの句を見たことがある」と言われましたが、「どんな検索をしたんだよ！」と思ったことでした。これは韓国的高级住宅街ではよく見かける風景。

◆ 遠火花おそろしきことおきさうな

「遠火花をこんな風に詠んだのは珍しいと思つた」と。まあ、遠火花は普通はロマンチックに詠むんでしょうね。

◆ 早起の蟬に起して貰ひけり

これはするつと出来た（出て来た）句。いじりようがない。

◆ 「つ」の字もて干さるゝものも唐辛子

類想句が多そう。ま、所詮は唐辛子が干されているだけのことで、つまらないですよねえ。

◆ 眉白き人も黄菊もますぐなり

これはどこに焦点を当てて句を詠んでいるのか分からない。

◆ 金色に海のきはまで稲さわぐ

江華島（カンファド）に行った時の句。こういう風景句が拙い。自分は人事の句が好きってことなんだろう。

◆ 後手の指うごめくや朝焚火

これは、住宅建設現場か何かを通りかかったの句。

◆雪降りゆく雪に重さのあるごとく

高層ビルの中からと思われそうだけど、案外に低い所（五階）から見た風景。このような「ごとく」の変な使い方が好き。

■二千四…水の惑星

◆浅春の時計屋くどいほど二時

これはイマイチ。「浅春の」とかいわれても何だかなー。

◆杖持たず小刻みに行くうららかな

これもイマイチ。老人が歩いている場面の描写だけど、内容に明るさがないってことも問題なんだろう。

◆大男ゐて火は吹かずビアホール

飲み屋に大男の客がいただけなのだが、それを頑張ってふくらませた。

◆かざすものかざしゆきかふ残暑かな

これはありがちな句のようだが、実は誰も言っていないことかもしれない。

◆どこまでも水の惑星秋漢江

これはひと目悪くないんだけど、地球を「水の惑星」というのは出来合いの言葉。

◆天高しいづこにランゲルハンス島

実体のない句で、言葉遊びを楽しむような趣旨の句。なお、ランゲルハンス島を詠んだ句は検索するとそこそこある。

◆冬銀河ボールつきつき帰る子も

バスケットボールをつきながら帰る高校生。

俳句はこのぐらいのことを言っておくのが正解かも。

◆くるりんと淑女をまはす忘年会

これは忘年会での社交ダンスの様子。韓国人は社交ダンスの出来る人が結構多いです。

◆ゆるやかに鐘ふりあげて慈善鍋

今は割りと珍しい題材、慈善鍋ですが、ソウルではよく見かけました。鐘の鳴る直前を描いています。

◆人呼べば懐手ごと振返る

これを「ポケットに手を入れたまま」のように読んだ人がいますが、それは違います。首だけ振り向いたのではなく、上半身全部（または全身）がまるごと振り向いた、というのが句意。

■二千五…しゃぼん玉

◆しゃぼん玉うたうたはずに壊れけり

ひらがなで書いたため、「歌々管に？」と思っただ人がいました。「歌を歌わずに」ということです。野口雨情の「シャボン玉」が下敷きになっています。

◆大辛夷屋根より高きよりひらく

これは学校を吟行した時の句。一物仕立てなんです。

◆海苔巻に光るもの塗る立夏かな

「光るもの」はごま油。韓国の軽食堂は大体、通りに面したところで海苔巻きを作っています。実演販売です。

◆傾くに松一途なり五月尽

これは吟行句会提出時は「傾ぶくに松一途なり南風」でした。季語を差し替えて「五月尽」に。南風よりは明らかに改善されていますよね。

◆瓜売りに来て助手席に三尺寝

「ウリウリがウリウリに来て…」を思い出してくれると嬉しい。ちなみに、なぜこのおっさんが助手席で寝ているかというところ、お客が来た時すぐに軽トラから降りられるように、です。

◆梅の実のたわわ李方子といふ人生

「李方子（イ・バンジャ）」といふ人生という言い方を褒められました。

◆もの問へど西瓜うなづく頸もたず

西瓜はある意味ヘンチクリンな果物で、その西瓜を題材にヘンチクリンな句を作るのが好きです。

◆飴売の小躍やまず秋祭

金子兜太来韓の時に、兜太センサーに採ってもらった。まあ、取り切りだったんですけどね。「取り切り」は、主宰などが数の制限なく選句すること。」

◆焼芋や焼かれる前は空の下

これは「焼芋や」を「焼芋くん」と直したいと思っている今日この頃だが、いずれにしても、この句は空の青さが見えないと駄目なんだろう。

◆首すくめ白きコートに沈みをり

これは街中で見た女の人。数合わせで出した句だったと思います。

■二千六…かるめ焼

◆浅春の光からめむかるめ焼

これは露天商がカルメ焼きを作っているとこ。自分は露天商を詠んだ句が多いかも。

◆蛇腹バスぬらりと曲る春の縁

問題の「はるのふち」です。「はるのふち」を持ってきたのは良いのですが、表記が「春の縁」だと「はるのえん」と読まれちゃうんですよね。大丈夫かな。「春のフチ」とか？

◆豆飯や鍾路を心のアジトとす

鍾路（チョンノ）はソウル市内の庶民的な地域で、その食堂で豆ごはんを食べていた時にこの句が出来ました。ちなみに「アジト」は元々ロシア語だそうです。韓国人にも通じます。

◆うえしたに揺れて刃を研ぐ薄暑かな

これはこの通りだったんですが、優れた俳人はこれを詩的に表現するのでしょうか。

◆二拍子で叩きまはるや西瓜売り

市場のおっちゃん、西瓜の客が来るたびにいくつかの西瓜を叩いていました。

◆冷房や囁きつづくキーボード

これはオフィスの様子です。

◆蟬捕りの安寿厨子王くもりぞら

オフィスから公園を見下ろしていたら、蟬とりの姉弟(?)がやって来ました。

◆八方に枕の高さに虫の鳴く

引越した先が、周りに緑が多い家でした。引越し当日の夜に作った句。

◆交番に月光ふるよキムサッカ

キムサッカはいにしへの吟遊詩人。イメージで持ってきました。

◆冬帽の具合を空に確かめる

これは確か、仁寺洞（インサドン）の帽子屋（露天商）で、おっさん客が帽子を試しかぶりしていたんだと思う。

■二千七…島の子

◆島の子は夕焼色にけんけんば

兼題「夕焼」の句。これは江華島（カンファド）に行った時のことを思い出して作ったのだが、実際に石蹴り遊びを見たわけではない。

◆デジカメを突き出す噴水は乱れる

徳寿宮で、噴水を撮っている女の人を見て。この乱れたリズムが好き。他が普通の五七五の句だから、時々ある変則リズム句が効くんでしょうね。後半部は「噴水★は井み♀だ▽れ※る」のように読んで欲しいかも。

◆はりぼての戦車美大の夏休み

これは韓国人に褒められたのだが、特に褒められる理由があるのかしら。

◆西瓜受く手首をかへしかへしては

「ほい」「ほい」と、西瓜を受け取る人が手首を回して受け取るのだが、それが上手く表現できませんでした。

◆走り来て野菊を叩く雨となる

これは動詞が四つも使われている。ここまで動詞が多いと、逆に許しちゃう。

◆秋澄むや向ふの橋の名は知らず

これは句会で評判が良かった句。ちなみに、「向ふ」は「向かう」と書く人の方が多いかも…。

◆シャネル掲げ行くでありんす翹雲

「ありんす言葉を使ってみました」で終わっちゃってる。季語の翹雲は多分違う。

◆目覚しの鳴りやみてより霜の朝
これはどういふことなのか、忘れてしまった。
目覚ましは鳴っているのを放っておいたって
ことなのか…。

◆尻二つ持つ動物へ暖炉燃ゆ
公園の事務所のようなどころで、大型犬を連
れた人が暖炉にあたっていました。

◆初湯殿高窓に日のあふれたり
これは銭湯の高いところにある窓から太陽光
が差し込んでいたということです。「初湯」と
聞くと家の風呂をイメージする人が多いみた
いで、「どんな邸宅だよ！」と思われたよう
です。

■二千八…白木蓮

◆俳句といふデジタルな趣味白木蓮

これは「白木蓮」が我ながら上手いと思っ
た。ま、実際に白木蓮を見て作った句なんです
けどね。

◆颯々と菜の花畠の半身浴

慶州に菜の花畠の見事なところがあって、そ
こに行った時に作った。

◆少年の時ありトマトすゝりをり

これは自由題の句会に出した句。誰が読んで
も間違いなく同じように読まれるのが、意外。

◆緑陰を出でて迷彩服のまゝ

緑陰が増殖するような感じがして好きな句。
ただし、このパターンだと緑陰の効きが弱い。
まあ、いつも季語の効きばかりを考えている
のもどうかと思うって話になるけどね。私
らは別に季語を働かせるために俳句を作っ
てるわけじゃないので…。

◆夏漢江バス思ひきり弧をゑがき

当初下五が「ゑがき」だったのだが、「ゑがき」
の方が良くない？と言われ、同意。最後に連
用形で終わっていると、上五の切れがシャ
ープになるんです。

◆炎帝の御前抱きあふ兵士像

戦争博物館の兵士像。あの像は、本当は兵士

二人ではなく、少年と兵士なんですよね。

◆レジカゴをはみ出す西瓜断面図
西瓜すげえ。西瓜くん、ありがとう。

◆韓心地落葉する時遠太鼓
読み終えると、上中下がバラバラの印象。最
初に「韓心地」と説明しちゃってるからダメ
なのか？

◆幼な木の空に誇らぬ紅葉色

これは「大きい木は紅葉色を空に誇るのに対
し…」ということが前提になっていて、なに
か理屈で読む句になっちゃってる。

◆天網や揺るゝことなき実南天

坪内稔典来韓の時に、ネンテン先生に採って
もらった。まあ、取り切りだったんですけ
どね。ソウル市内の北村という住宅街を吟
行しての句。

■二千九…囀られ

◆囀られてをり糠床委員会

これは奇をてらいすぎかもしれない。情景と
しては、糠床を手入れしていた時に、鳥が啼
いていましたよ、ということなんですけど。

◆春深き脚にほくろの二つほど

これはどこで作ったか忘れたが、よく見かけ
る光景だろう。

◆芝に生れげんげはげんげ田の匂ひ

芝にげんげが生えていたのが珍しかったので
作りました。

◆手廂の唇に意志あり青嵐

これは地味（というか、ありがち）な句だろ
う。並選で採ってもらえそう。

◆たくらみは樹に一つづつ戻り梅雨

「これはイイ！」と言った人がいたが、嫌う
人多そうなの。

◆向日葵といひて向き向き現世は

「ひまわりは太陽の方を向くというが、この
世では、ひまわりなのに各々が勝手な方を向
いているね」が句意。

◆ベビーカー古宮のかはみどりに止る

ペビーカーと古宮の取り合わせがあざといか。「止まったからって何だよ」とも言われそう。

これは一句の中で「高いところからどンドン低くなっていく」感じになっているんだけど、どうだろう。

◆風やめば冬のころ芯をとりもどす
この言い方は結構ありそう。ねこじやらしつてのがそもそも、今更詠みたいものじゃないしな！。

◆立ち漕ぎの少年消えて新紅葉

◆クリスマスめくことひそか盲導犬
盲導犬の内面に迫った句で、題材も言い方も珍しいかも。

自転車の立ち漕ぎの少年がいなくなつて、そこに新紅葉があることに気づいた…。「立ち漕ぎ」だけで「自転車の立ち漕ぎ」って伝わるでしょうか。

◆つんのめり火を運び来る炭熾

◆カムジャタンへすいとんちぎる夜長かな

焼肉屋の炭担当の兄ちゃんが中国映画のキョンシーのように火を運んで来たので作ったが、イマイチ。いわゆる「報告で終わっちゃつてる」ってことなんだろう。

■二千十…浮遊術

◆花の下誰もが空中浮遊術

■二千十一…春満月

自分がこんななストリートな句を作るのは珍しいかも。桜の句はストリート句もひねり句も面白いんだろう。そこが桜の懐の深さ。

◆春満月日暮れを待たず灯りたり

◆吐き出せば風のかたちに桜ちる
これは南山韓屋村。「吐き出せば」という表現に共感してもらえるかどうかだろうな。

これはどうなんだろう。句として、ぼんやりし過ぎか。

◆梨泰院の露店に春燈またひとつ

◆花冷えのオンドルの床ことに冷ゆ

これは弱いな。「露店に春燈」とか言われてもイメージ掴みづらいし。

よく、韓国語の「コッセムチュイ」を「花冷え」と説明している人がいるが、「コッセムチュイ」はまだオンドルが入っている頃の寒さだろう。この句の「花冷え」の時期ではもうオンドルは切られている。

◆窓外のジオラマの街大夕焼
「ジオラマのごとき街」と言わなくても、これでもいいんだと思う。

◆地動説か雲動説か麦の秋

◆お散歩へヘレン・ケラーの夏帽子
大昔に観た芝居『奇跡の人』（大竹しのぶ、奈良岡朋子）の世界がこんなところで蘇るとは。

これはどこで作ったか記憶なし。漢江べりあたりか。

◆六月のよるのサンドウブ白磁色

◆まくなぎを突つ切り河原コンビニへ

これは「六月ってことで、白夜のイメージも感じて良かった」と評された。嬉しい。

まくなぎの話が単に突つ切っただけで終わっている。もったいない。「河原コンビニ」などと具体的に言う必要はなかったのかも。

◆秋の午後濡れ自転車の七八台

◆黒トマト八百屋店先勢力図

「濡れ何々」というものはほとんど全て好き。一番は「ぬれ煎餅」。

これは名詞だけで作った句。八百屋と魚屋が好きだわ！。

◆天高し高菜キムチのお裾分け

◆交番の片陰およそ樞大

よく、「暑いので片蔭伝いに行きました」のよ
うな句を作っている人がいるが、片蔭という
季語はそういう風に使うもんじゃないと思う。

◆夕焼を指さすための肩車
肩車をして歩いている父子を見て作った。夕
焼けを指さしているところを実際に見たわけ
ではありません。

◆句またがりフェチなるわたし晩夏光
俳句をネタにして作られた句を嫌う人がいる
んですよ。まあ、その気持ちは分かります。
この句は「句またがり」のことを題材にして
いますが、この句自体が句またがり形式にな
っているのはお約束。

◆極月の夜むきだしの海苔を売る
詳しく言うと、「露天商がむき出しの海苔を並
べて売っている」ということです。

◆初あかり一句一章二句一章
「一句一章二句一章」というフレーズに対す
ることができるのは、多分「初あかり」しか
ないでしょう。

■二千十二：春は夕暮れ

◆春は夕暮れ風ともいへぬ風を受く

『枕草子』の「春はあけぼの」へのオマージ
ユ。それだけ。

◆むきだしのことば日傘で攪拌す

俳句初心者に感心された。「むきだし」は三句
前にも使っているんですね。

◆止りみてウインドサーフィン息もせず
漢江で見たウインドサーフィン。川なので、
あまり揺れないんです。

◆過去配りをり梅雨空の郵便夫
郵便配達は過去と現在を繋ぐ人。

◆アイフォンをこするをんなへ梅雨あがる
アップル社のスマホ。正しくは「アイフォ
ン」だそうです。電車内の光景。

◆八月のやせ糠床を励ませり
糠床をかき混ぜている。実は冷蔵庫内保管の
糠床なので、あまり痩せてはいない。

◆長ければ横たふ韓の西瓜かな
韓国の西瓜はなぜか細長い。西瓜は真ん丸で
あって欲しい。

◆鶏卵と俳句のたまご星月夜
卵だけで作った句。なのでやはり説得力が弱
そう。

◆息白し正直族のかれかのぢよ
出勤途中(?)の三十歳ぐらいの男女を見て
…。下五はやはり平仮名書きになるんだろう。

◆去年今年3・11以前以後
これは「さんてんいちいち」ではなく「さん
いちいち」と字足らずで読まれるのを希望。

■二千十三：ゆずすゝる

◆春昼のずるり柚子茶のゆずすゝる
ウ段の音を多用した造りになっています。「う
んううお・うういううあお・ううううう」

◆サドルごと水平移動春日向
一時自転車マイブームになっていて、自転
車を詠んだ句がいくつか作られました。

◆屋根を打つ私雨いや桜雨
自分の家に降っている雨の音のことなんです
が、うーん。

◆特売の西瓜を囲むミサ帰り
日本人に褒められた。題材が珍しかったから
だと思ふ。

◆楽隊にただついてゆくみどりの夜
この句は好感を持たれやすい。ちなみに、「つ
いて」を漢字で書くとすると「蹤いて」のは
ず。色々難しいんですから。

◆古着屋の風鈴鳴つてみせにけり
家の近くに古着屋がありました。古着屋は句
材として重宝します。といいつつ、句はこれ
しか作ったことがありませんけどね。

◆梨ひとつ明日の自分と半分こ
「明日の自分と半分こ」は決してオリジナリ
ティのある表現ではないんですね。検索す
ると分かります。

◆エノキダケ更に干すべき股湿り

このエノキダケは年中あるものなので、この句は無季句に分類しています。

◆穴掘つて霜夜のたまごかけごはん
 こういうのはいつも俳句俳句したの（オーソドックスな俳句）を作っている人に評判がいい（羨ましがられる）みたい。それはいいんですが、やっぱり卵かけごはんは朝の食べ物かも。

◆売店に潜むをんなや冬木立
 ソウルでは街のいたるところ（バス停の近くなど）にキオスクのような売店があります。それを知らないとの句は分かりにくい。あ、というか、「キオスクに潜む」と言った方が良かったのか…。

■二千十四…日の盛

◆類人猿スマホ人類日の盛
 いわゆる「スマホ歩き」をしている人を見て作りました。これは典型的な失敗作ってやつでしょう。

この句以降は日本で作った句です。

◆踏みはずすことなき女踊かな
 隣り町の阿波踊りを見に行つて。踊りを一時間見続けて得た結論がこれ。

◆遠き日の渦巻く記憶野分立つ
 これは字面がごちゃごちゃしている。だからダメってわけではないんだろうけど。

◆郊外型書店無月に発光す
 これは行く先々で（？）評判が良い。題材の珍しさと「発光」という直接的な物言いが良いらしい。作った時に、「銀行員等朝より蛍光す烏賊のごとく 金子兜太」が頭の隅っこにありました。

◆秋澄むや大井川たる鉄橋音
 この「たる」は「大井川という名前にふさわしい」という意味なんです、大丈夫なんすかね。

◆稲架とばりつくづく吾は農家の子
 「つくづく」が言い過ぎのようにも思えます

が、内容が内容だし言い過ぎちゃっていいんでしょうね。

◆秋深む目ぢから&つけまつげ
 ふざけて作っているようですが、結構鋭いところをえぐっているつもり。

◆芭蕉忌や小澤實のうすわらひ
 「薄笑い」ってのはちよつと違うと思うんですが、他の表現が思い浮かばない。

◆雪富士を背にランドセル跳ね来たり
 これは主宰クラスに気に入られる句だと思えます。こういう句も出さないとね。

◆良いニウス悪いニウスの四日かな
 六十代のおっさんに「現役時代を思い出した」と言われました。そう、このニウスってのは社内の噂話、人事ニュースの類いなんです。

■二千十五…木蓮の道

◆木蓮の道と名付けて待合はす
 品の良いおばちゃんがこの句を採って、「こういう素敵な人とお友達になりたいと思いました」と…。そうだろう、そうだろう。

◆目借時ロバのパン屋のうなづき来
 「ロバのパン屋」はローカルネタなんですよね。太平洋ベルト地帯の人は分かるのかな。「ロバのおじさん、チンコロリン♪」ってね。

◆花筏己が速さをすぐ覚ゆ
 花筏の句を作ったのは初めて。これは「花筏という季語くん、ありがとう！」ということになるのだろう。桜の周辺は言葉、表現が豊富にありますね。

◆葉桜のさくらの加減葉の加減
 これはこの十句の中では大人しい句。箸休めのな句で、置いておいても邪魔にならないですよ。

◆蓮の葉の風に遅れて水こぼす
 元々「露こぼす」だったのだが、「露は秋の季語になっちゃいますよ」と言われて「水こぼす」に変更した（「蓮の葉」は夏の季語）といういきさつがある。別の人には「雨の露だろ

うって分かるから、露でいいんじゃないですか？」と言われる。いやーん、困るわあ。

◆震度五に我ら沈着衣被

これはちよつと大胆。「この句のテーマ、内容はともかくとして、まあ、季語はこれで良からう」みたいに言われました。

◆梨林檎柿ニツポンの噛み応へ

これは意図的なトリプル季語。この句は、「迷ったんですけど、結局ボツにしました」と言われるのがオチかもしれない。句が抽象論になっちゃってるんですよ。当然ちや当然なんでしょう。

◆ワシコフを撃て藤の実のはじけとぶ

このワシコフは、西東三鬼の「露人ワシコフ叫びて石榴打ち落す」に出て来るワシコフです。ワシコフ、か・わ・い・い。

◆ど忘れに固まる二人神無月

これは実際に固まった経験をもとに作った句。

「まあ、こういうことはよくあるわよね」

◆大寒波来るらし流し台べこん

「べこんと鳴る」と言わずに「べこん」だけでもいいですよ。前半後半の関係が、付き過ぎず、離れ過ぎずのつもり。

■二千十六：さへぐり

◆さへぐりや切株といふ忘れ物

以前に見た林の光景がなぜか思い出されて作句。何でもいろいろ見ておくもんだ。

◆句碑の句を解いてみせたり梅見客

これは熱海の梅園。

◆左右より黄瀬川囃す桜かな

川の名前に「黄」という色名が入っているのが好き。橋の上からの句って時々作っています。

◆田水張り等倍の富士納まりぬ

「等倍」という言い方をほめられた。この言葉って、書類をコピーする時ぐらいいしか使わないですよ。普通は「実物大」って言うんだと思う。

◆ぞはぞはと遠き神輿になびきをり

これは「オノマトペの句」に分類されて終わりなのかも。

◆朝蟬や引越の荷を抱き余す

「抱き余す」が一番言いたかったところ。

◆蓑下げて鵜匠の腰となりけり

「長良川の鵜匠の一日」というようなテレビ番組を見て作った。鵜匠の身支度のシーンなど、普通は見られないですよ。

◆天井のネタの総立ち冬初め

「ネタのひしめく」が最初に出て来た言葉だったけど、これではありがちなので「ネタの総立ち」に。「寝た」↑↓「立ち」の隠し言葉の面白さに気づきました？

◆小椋佳小川軽舟銀杏散る

二人の経歴だけではなく、「o g : k e i :」の音の類似も。なので、上五中七が少しリフレインっぽくなっているはず。

◆或る主婦の忌日勤労感謝の日

上五は敢えてぼかした書き方をしている。このぼかし方をしたのは初めてかも。

■二千十七：やゝありて

◆やゝありて泣き足す幼梅の庭

「泣き足す」をほめられた。それにしても、「愚図っている子ども」という素材だけでこの句を作った自分は正直大したものだと思った。

◆どこまでがわたくしの揺れ春の航

初島行きフェリーにて。大型客船だとこの句は出来ないはずなので、俳句屋には小さい船での船旅を推奨。

◆唐揚と何でしたつけ春暖炉

ここは喫茶店とスナックの中間のようなお店。おっちゃんが一人で切り盛りしていた。

◆畳まれて布となりけりこひのぼり

これはテレビで見た風景だったと思う。まあ、実際に目にもすることもありそうですけど。

◆真桑この昔のまゝを撫でまはす

真桑瓜をもらって…。上五がこういう形で始

まるのは珍しいパターンだと言われました。

◆少年の手に手にラムネ瓶濡れて

この句の舞台はなんと、お祭りの夜の業務ス
ーパーなんですよね。ラムネが沢山氷水に浸
けてあって、それを中学生男子グループが一
本一本取り出して行ったんです。

◆見下ろしてこそ秋天の城下町

地味過ぎるなあ、と思っていましたけど、「この
句は大らかでいい」と言われました。

◆長き夜やオレのわたしのテレサ・テン

季語がこれでいいのか疑問。代案がないので
これになっています。

◆火葬場のけふひときはの雪の富士

「ひとときわ白い」のか「ひとときわ大きい」の
か、肝心なところを敢えて書きませんでした。
「敢えて書かなかった」とは読んでくれない
ようですけど。

◆武蔵野の淑気をシャドーボクシング

この句はまあまあだと思っただけですけど、シャ
ドーボクシングを知らない人がいるんですよ
ね。悲しい。ちなみに、二千二年に「冴ゆる
夜や時折シャドーボクシング」という句を作
っています。

■

書名：自句自解（二千十七まで）

発行日：二〇一七年七月十七日 第二版

著者：杉山杉久

発行者：杉山杉久

Web：www.ysugiyama.com

メール：y@ysugiyama.com